

# 指導資料

鹿児島県総合教育センター

## 教育相談 第132号

—小学校，中学校，高等学校対象—

平成25年10月発行

### コンサルテーションの在り方と「援助チーム」の連携

今日、学校教育の現場では、不登校、いじめ、問題行動など児童生徒の諸問題に直面しており、児童生徒を直接支援する機会の多い学級担任が一人で悩みを抱え込み、更に事態が悪化する場合がある。その解決策として「援助チーム」を作ることは重要なことである。「援助チーム」は、学級担任、保護者、スクールカウンセラー、教育相談係、養護教諭などが主な構成員となる（以下、「援助チーム」とする）。その援助チームの中では、教育相談担当者が学級担任・ホームルーム担任へのサポートとなるコンサルテーションを行うことが有力である。

そこで本稿では、コンサルテーションによるチームでの援助の在り方を述べていく。

#### 1 コンサルテーションの意義と目的

一般的に教育相談におけるコンサルテーションとは、児童生徒の理解や援助に関する支援者の課題に対する援助（間接的援助）のことであり、コンサルテーションを提供する側をコンサルタント、コンサルテーションを受ける側をコンサルティという。例えば、担任が保護者と児童生徒の発達上・教育上の課題をめぐって話すとき、担任は保護者にコンサルテーションを行っている形となり、コンサルタントが担任、コンサルティが保護者の関係となる。その担任が教育相談担当者から保護者の支援方法を助言してもらう場合、コンサルタントは教育相談担当者、コンサルティが担任の関係となる（図1）。

図1は、担任が保護者にコンサルテーションを行っている形となり、コンサルタントが担任、コンサルティが保護者の関係となる。その担任が教育相談担当者から保護者の支援方法を助言してもらう場合、コンサルタントは教育相談担当者、コンサルティが担任の関係となる（図1）。

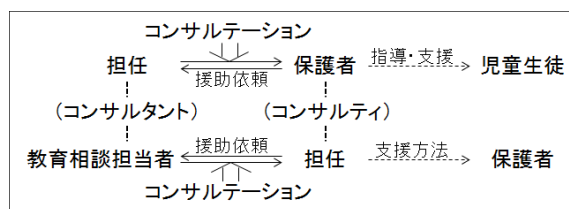


図1 コンサルタントとコンサルティの関係

相談活動におけるコンサルテーションの目的は、コンサルティがコンサルタントの援助によって問題解決に当たった具体的な対処方法を見付けたり、コンサルタントがコンサルティの情緒的なサポートをしたりすることにある（表1）。

表1 コンサルティの情緒的サポート効果

- ・ 自責感や負担感が軽減される。
- ・ 焦り、あきらめ、失望が防止できる。
- ・ 「孤立化」が軽減される。
- ・ 無力感が軽減される。
- ・ 自尊心や有能感を回復する。

## 2 相互コンサルテーションと援助チームの 主な機能

児童生徒の問題状況が困難な場合、援助チームを構成した対応が効果的である。  
石隈<sup>\*1)</sup> (2003)によれば、援助チームの目的は「児童生徒の学習面、心理・社会面、進路面、健康面における問題状況の解決を、複数の教師・専門家と保護者で行うこと」とされ、表2のような機能がある。

表2 援助チームの主な機能

- ・ 複数の教師・専門家からなり、児童生徒を多方面から理解できる。
- ・ 児童生徒の問題状況に応じて効果的な解決が図られる。
- ・ 教師が児童生徒を効果的に指導・援助する案を具体的に提供し、担任への情緒的なサポートができる。
- ・ 保護者に児童生徒の関わり方を具体的に提供する。保護者の情緒的サポートも行う。
- ・ 構成員の援助力が向上する。援助力は他の児童生徒にも生かされ「予防的」にも働く。

援助チームでは、例えば教育相談担当者が児童生徒と直接関わって面談を行う際に、コンサルタントである担任から支援の有力な情報を提供してもらう場合もある(図2)。

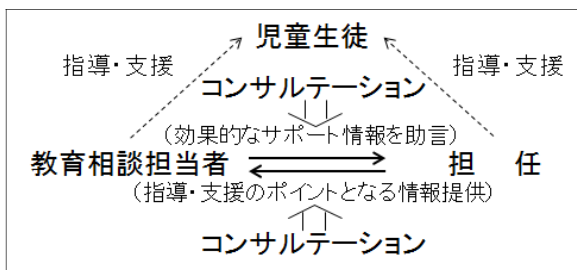


図2 双方向の支援関係の例(相互コンサルテーション)

このように援助チームでは、コンサルタントとコンサルティの関係は一方向ではなく、コンサルタントとコンサルティとが入れ替わる双方向型の関係となる。課題のある児童生徒に対して、複数の援助者が協力・連携を図りつつ協働するコンサルテーションは相互コンサルテーションといい、表3のようなメリットがある。

表3 相互コンサルテーションのメリット

- ・ 児童生徒と直接的に関わる構成員同士が協力して、児童生徒を総合的に理解しようとする。
- ・ 教師や保護者はコンサルティに固定されないので、教育相談係の依存や抵抗が少なくなる。
- ・ 直接、援助の機会が少ない教育相談係がコンサルテーションを得る機会となる。

## 3 援助チームにおける話合いの進め方

援助チームで児童生徒の問題解決策の話合いを進める場合、次の3点に留意する。

表4 援助チームにおける話合いでの留意点

- ・ 各自の専門性を尊重する。
- ・ 会議での専門用語の使用をできるだけ用いないようにし、やむを得ず使用する場合は説明を加えるようにする。
- ・ コンサルティが自信をもって児童生徒に支援ができるように希望が見えるような提案をし、勇気付けることを目標にする。

\*1) 石隈利紀・田村節子著『チーム援助入門 学校心理学・実践編図書文化』平成15年 図書文化

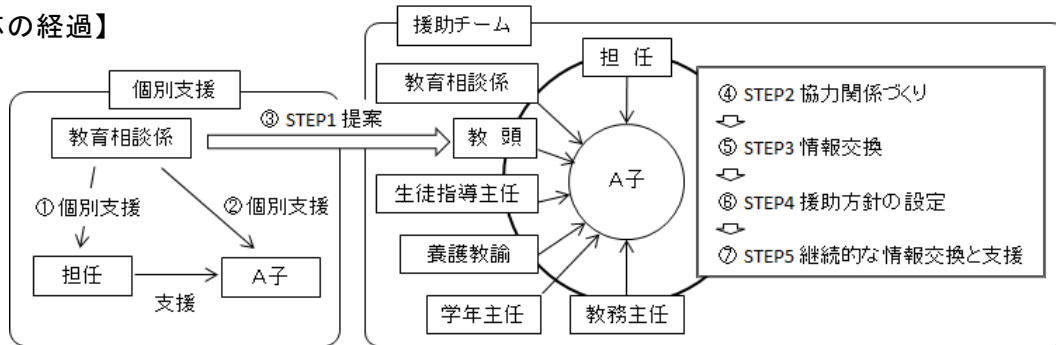
## 4 コンサルテーションの実際

次に、具体的な事例を基に「個別支援」から「援助チーム」への過程を示す。

### <事例の概要>

高校3年生のA子は、1学期は受験のことを意識して「多少無理してでも頑張ろう。」という思いが強かったため、欠席は多くなかった。2学期になり、志望していた専門学校の推薦入試が終わった10月下旬から欠席することが多くなり、11月には登校しても教室に入ろうとすると、恐怖心から動けなくなった。こうした中、授業時数の不足が心配される教科科目も出てくるようになり、このストレスが一層A子の緊張を高めていると判断した担任は、A子の対応について教育相談係に状況を報告した。

### 【対応の経過】



#### ① 【個別支援：教育相談係と担任の面談（コンサルテーション）】

- 教育相談係は、コンサルティであるクラス担任が捉えているA子の問題や課題についてよく聴き、特に「何に困っているのか」、「何を迷っているか」を確認した。また、コンサルティが工夫してうまくいっているところやできているところについても確認し、コンサルティの努力を認めるようにした。

〔担任の状態〕

- ・ A子に対しての具体的な支援の方策が検討できない。
- ・ 卒業してもらいたい思いと授業時数の不足という現実に対して強い不安を抱いている。

#### 【留意点】

- ・ 教育相談係はコンサルティと面談をする際は、悩みを汲取り、一緒に考えるというスタンスが求められる。

また、コンサルティのニーズを十分に考慮し、情緒的サポート（支持、励まし）、情理的サポート（資料提供）、道具的サポート（解決案のリハーサルを行うスキル向上の場の提供）などを行う。

#### ② 【個別支援：教育相談係とA子の面談】

- 教育相談係は、A子が登校できた日に教育相談を行った。面談の初めは黙っていたが、摂食障害に悩んでおり、自分の体型がクラスメイトからどのように見られているのか気になるため、教室に近づくと緊張が非常に高まり入室できないことが分かった。

#### 【留意点】

- ・ 生徒の話をも十分に聴き（傾聴）、受け止め（受容）、生徒の心で感じ取る（共感）ことが大切である。そのためには、児童生徒一人一人を「かけがえのない存在」、「自らよりよく成長するもの」として捉える生徒観に立つことが求められる。

#### ③ 【援助チーム：STEP 1 提案】

- 教育相談係は、担任・養護教諭と協議した後、教頭にA子の対応はチームによる援助が望ましいことを伝えた。
- 後日、職員会議は開かれ、担任がA子の状態を報告した。援助チームの必要性については、教育相談係が説明した。

#### 【留意点】

- ・ 自殺未遂など緊急性が高い問題の場合は、問題状況を速やかに把握し、即時性と積極性が結果を左右する。緊急の職員会議が開かれるよう連携を密にした対応で臨む。

#### ④ 【援助チーム：STEP 2 協力関係づくり】

- 援助チームの構成員は教育相談係と教頭が検討し、担任、養護教諭、教務主任、生徒指導主任、学年主任とした。

- 援助チームの会議については教育相談係が進行を担当し、初めにコンサルテーションのガイダンスを行い、目標を考える場であることを伝えた。
- まず、コンサルテーションの内容について守秘義務を確認をしてから、A子に関する情報交換を始めた。

**【留意点】**

- ・ 援助チームの構成員は、児童生徒に関わりのある教師で構成する。左記以外の構成員としては、部活動の顧問、前担任、図書司書、教科担任などが挙げられる。

**⑤【援助チーム：STEP 3 情報交換（相互コンサルテーション）】**

- A子がどのような状態にあるかをお互いに情報提供をし、チームとしてどのような支援ができるかを検討した。  
＜情報交換の一場面＞

- 担 任： A子は学業成績の面では問題がなく、専門学校への進学も決まっており、もし、卒業できない場合、強い情緒的混乱が懸念されます。
- 養護教諭： A子は教室に入れなかったときは必ず保健室に来ています。この前、「誰も居ない教室だと気分が楽なので自主学習はできると思います。」と話していました。
- 生徒指導主任： 生徒指導連絡協議会で同様のケースを、別室登校で対応した学校があったとの事例報告がありました。
- 教務主任： 別室登校の授業時数の読み替えについては、現行の教務内規に無いため、職員会議で諮る必要があります。
- 教育相談係： A子さんの今の状態をよりの確に把握するためにも「学校楽しいと」を実施してみませんか。
- 教 頭： 専門機関に健康福祉センターの思春期相談もあります。
- 教育相談係： それでは、今の意見を参考にして、これからA子さんの援助方針を検討します。

**【留意点】**

- ・ コンサルテーションは、「援助チームの構成員を評価しない」、「話合いが自由に発言できる場になるように参加者の気持ちが傷付かないよう批判や非難をしない」、「自分とは異なる意見であってもじっくり聴いて自分の考えを伝えるようにする」ことを確認する。

**【留意点】**

- ・ お互いの役割から援助に関する情報を積極的に提供し合い、援助方針を検討していくようにする。

**【留意点】**

- ・ 話合いの最後に問題状況の解決へ向けての具体的な指導方針を設定する。

**⑥【援助チーム：STEP 4 援助方針の設定】**

- 情報交換を基に検討した結果、A子が卒業できる条件を整えるために、別室登校の形態を準備し、授業時数の読み替えができるようにした。また、保護者にはA子の通院を促し、健康福祉センターと連携して対応することを確認した。

**⑦【援助チーム：STEP 5 継続的な情報交換と支援（相互コンサルテーション）】**

- A子はしばらく別室登校をしていたが、通院によって次第に回復し、12月中旬からは教室に戻れるようになった。援助チームはA子の様子を観察して気付いたことの情報交換をするとともに、状態に応じて必要と思われる支援策を検討するようになった。

近年、職員間の連携した対応や校内支援体制の必要性はより重視されつつある。コンサルテーションは、校内支援体制の充実や対象児童生徒の理解、支援の在り方など課題解決に向けて大きな効果を上げることが期待される。問題を抱える児童生徒の対応を担当など一部の教師が抱えることがないよう、コンサ

ルテーションによる支援関係をつくり上げていくことを大切にしたい。

－参考文献－

- 文部科学省『生徒指導提要』平成22年
- 鹿児島県総合教育センター『指導資料 特別支援教育第167号』平成24年
- 石隈利紀著『学校心理学』平成16年、誠信書房
- 石隈利紀・田村節子著『チーム援助入門 学校心理学・実践編 図書文化』平成15年、図書文化

(教育相談課)